

Graded Direct Method Association of Japan

News Bulletin

第33号

英語教授法通信

1981年6月1日

編集・発行・GDM英語教授法研究会 事務局 〒154 東京都世田谷区豪徳寺2-27-19 吉沢美穂方 TEL.(429) 5929

自分にきびしく のんびりと やりましょう

吉 沢 美 穂

1980年代は、GDM研究会が、現在のような形をとりはじめてから、30年目から40年目代に当たります。前回は、昔のことを書いたので、今回は、GDMの80年代の展望や、期待について書きましょう。

あと10年以内には、各種の英語教室だけでなく、一般の中学校でも、盛んにGDMが取り入れられて、日本の英語教育が現在よりもずっとよくなる。というような勇ましいことを、私が書くことを期待しているかたもあるかもしれませんが、私はGDMが量的に広がることは、期待してもいないし、希望していません。

GDMを知って比較的新しい会員から、なぜGDMはもっとPRをしないのか、という意見がよく出ますが、私の希望は、GDM精神の骨のない、GDMに似た教えかたをする人の数を増すという量的な広がりでなく、ほんとの意味で優秀なGDMの実践家が、ひとりでも多くなるという、質的なものなのです。

私ははじめからこの方針でやって来たのですが、現在では、GDMという名前だけでなく多くの人に知られ、はじめは、たったひとりで始めた活動が、今のように実践家の数も多くなったのを見ると、やっぱりそれでよかったのだと思います。

私が今までやって来たのと同様のことを、

10人がやるとすれば、今までの10倍の成果があがる計算になります。それも「長年の辛苦を重ねた結果」などというような悲愴感のあるものではなく、趣味で植木を育てるような、また家庭でクッキーを作っては、出来ばえに、よること、がっかりしたりするというように、のんびりした気持ちでやればいいのですから、私のあとに続くかたに期待することは、GDMの実践家として、のんびりと、しかし重要な点だけは、しっかりつかんでやっていただきたいということです。

その重要な点とは何か。それが問題なのですが、まず英語を教えるのだから、英語の力が無くては問題になりません。自分で料理ができないのに、人に料理を教えたり、自分は飛び箱も飛べないのに、体操を教えようと思う人がどこにあるでしょう。すくなくとも、EP Book II の終りまでくらは、自分のものになっていないと、Book I の30ページまでも教えられるのです。ところが案外、自分に英語の力が無いことに気が付かない人が多いのは困ったものです。

第2は、教える方法の工夫です。これを考えたり、練習するために、セミナーでも、研究会でも、多くの時間を使っていることは、今さら言うまでもありません。

第3は、GDMの根本にある、種々の理論

を、しっかり身に付けることです。よい実践家になるためには、勉強しなければだめなのです。これは、前に述べた第1と第2がよくできていてこそ、はじめて身に付くもので、理論だけが、いくらよくわかっていても、よい先生にはなれません。GDMで教える時、規則は、先生が与えるのではなく、生徒が発見するものであると同様に、理論を勉強する時、与えられたものを受けとるのではなく、ある理論を読んだら、なるほどそうだ、そう言えば、あの場合も、この場合も、この理論が当てはまる、と自分で例をあげられる実力があってこそ、勉強することが、はじめて身に付くのです。

以上GDMの先生として重要なことをあげましたが、先生に要求されることと、生徒に教えることとは、はっきり区別されなければなりません。たとえば、root sense と metaphor, general と particular の区別などは、先生としては身に付けていなくてはなりませんが、そのちがいを生徒に教えようとしたり、わからせようとしてはならないのです。自分の知っていることをすべて、生徒に教えたいくなるのは、教師としては最大の誘惑です。気をつけましょう。

さて、以上のことをふまえて、教室で教える場合、前に述べたこと以外で、しかも何よりも大切なことは、先生と生徒の心のふれ合い、別のことばで言えば、生徒の心の中に起っていることを、すぐ感じとり、それによって自分の路線を変更できるかどうかということです。

先日、月例会で、とてもいい授業を見ました。Teaching point は What...? で、GDMの経験は、まだ2、3年という若い先生でしたが、生徒に、ほんとに疑問を持たせた見事な導入と練習が進みました。ところが live から絵に移った頃から、生徒の発表が急に不活発になりました。そして授業の最後

のしめくくりとして、先生は、何だかわからない物を見せて、Miss A (ここで教えている他の先生) gave it to me. と言い、What is that? という文が生徒から出ることを予期しましたが、生徒の間にざわめきは起ったものの、その質問はとうとう出ませんでした。なぜそんなことが起ったのでしょうか？ 生徒が絵に移った時不活発になったのは、その時までには、What is this (that)? の文はよくわかって、言えるようになっていたのでこれでもか、これでもかと次々に絵を見せられて、同じことを言われるのがいやになったのです。最後の部分の不成功は、すこしちがいます。他の先生が、その物を自分の先生に贈ったということが、強い印象を与えたので、生徒の気持は、What is that? ではなく、What did Miss A give to you? だったのです。でもこの文はまだ言えないので、先生の予期した文が出なかったのです。

生徒の気持を感じとるというのは、このような場合、す早くそれを見ぬく力のことです。それがない場合、授業が白けるのです。

4月から新しいクラスが始まります。Book Iのはじめから教えるのは何回目か数えきれないくらいですが、私はいつもそのページを前にやった時のことは白紙にして、はじめてそこを教えるつもりで計画をたてます。絵や物品も新しく考えて用意します。そうしないと授業に新鮮味がなくなるのです。このようにして、GDMを始めて数十年にもなるのに、今でも新しい発見が続いています。

以上を読み終って、はじめに「のんびり」と言ったのに、あとではきびしいことばかり並べて、前後が不統一だと思いかたも多いでしょう。でも不統一ではないのです。あとに述べたきびしいことが、のんびりと出来るようになった場合、私たちはGDMの実践者として、ひとりまえになるのです。

G D M と 私

竹 中 久 美

私が初めて「GDMショック」なるべきものも受けたのは、大学3年の時の吉沢先生の英語教授法の授業でした。日本語を使わない、教師のくり返しでなくそれぞれの立場からの意味のある英語ですすめる授業、こんな理想的な教授法が存在すること自体が、大きな驚きであり、感動でした。英語教師を目指していた私には、「これしかない！」という確かなものを発見した思いでした。授業では他のメソッドの紹介や批判、そして「何故、GDMか」ということが中心でした。理論のあとは実践で、大学生である私達の一人一人が交互に教師になり、クラスメートを相手に授業をしました。みんな、なかなかユニークで、吉沢先生の若々しい笑顔ときびしい批評も素晴らしく、GDM精神にあふれる楽しい授業でした。この授業が、今の私のバックボーンになっていると思います。

やがて大学を卒業し、横浜市の公立中学に就職、1年生の担任となり、理想に燃えてGDMにとりくみました。初めての授業で、IとYouをやった時の喜びは、忘れられません。日本語は使わなくても、「わかった」という顔で「You」と私を指さす生徒たち。この時ばかりは、できる子もできない子もなく、一人一人が英語を話す喜びと自信に満ちあふれていました。教室には、英語の心地良い音だけがひびき、すっかり日本語を忘れて、1時間1時間が過ぎていきます。しかし、以外に早くGDMの授業はカベにぶつかってしまいました。他の先生方が入門期の指導を終え、教科書に入るようになると、やはり私も教科書をやり始めなくてはなりません。もちろん教科書のグレードはGDMと違いますし、語いも、かなりの量が一度に出てきます。中間テストは、他のクラスと同じ範囲をこなさなくてはならないのです。

GDMを現場にとり入れると、必ずぶつか

るのが、このテストというカベです。GDMをとり入れているいくつかの学校のように、教師が一致してGDMで教えていれば、テストもGDM式に行なえますし、受験にも、GDMをやり終えてから教科書をまとめてやるという方法で対処していくことができます。

しかし、現在、学校ぐるみでGDMをとり入れることが難しい状況では、かしてこのテストというカベを乗り越えてゆかなくてはなりません。テストのために、教科書を使いながら、私の努力していることは、GDMの立場からすれば、大変不十分ですが、第一に、入門期にできるだけ長くGDMを続け、GDMの精神を植えつけること。導入は必ずGDMでやること。ドリルもひんぱんに絵や写真、実物で行ない、不自然な文を言わせないようにし、訳したり、日本語に頼る授業にしないことなどです。これだけでも、ずい分、教室での日本語は減り、活潑に生徒の参加する授業ができます。現在、社会問題になっている校内暴力も、「わからない、つまらない授業」が、大きな一つの要因になっていることを考えると、GDMの「わかる、楽しい授業」は、私たち教師にとっても生徒にとっても救いです。

研究会でのデモンストレーションは、YMC Aなどで「英会話」のクラスとしてGDMを習っている生徒が多いのですが、やはり生徒が英語を学ぶのは、学校が第一であるはずです。学校英語がもっと楽しく、身につくものになるためには、私たち現場の教師が自己を大いに訓練し、勇気を持って、GDMを現場にとり入れてゆくことだと思います。

GDMは教授法の理想です。それに一步でも近づくように、これからも努力してゆきたいと思います。

横浜市立共進中学校教諭

GDM病に冒されて

伊場野 昭子

GDM病には、三期の症状がある。

第一期は 熱病期。

どの教え方にも納得できず、悩んでいる身は、GDM菌に冒されやすい。熱病はたちまち全身にまわって、目は血走り、「GDM GDM」と寝ても覚めても、うわごとを言う。

第二期は、有頂天の熱が引き、GDMを実際に教え始めてから、ジワジワと訪れる落ち込み期。熱病は去り、寒さでガタガタする。

生徒の自発性を言いながら、押しつけをやっていると、自分の理想に体がついていかない。授業の出来に一喜三憂し、教案の具体的なことから始めて、生徒との関係性、そもそも教えるとは何か、はたまた、自分の人格まで懷疑と疑問、自信のなさは拡がる。

また、こういう自分を棚上げして、GDMは何々の欠点があるじゃないかと、かつてあれほど五光のさしていたGDMに、逆恨みをする症状が出てくるのも、この第二期だ。

第三期は、GDM菌との共存・安定期。実際に教え続けているうちに、自分が勝手にあがめていた救世主としてのGDMの幻（地図）ではなく、現地としてのGDMがやっと見え始める時期でもある。幻の五光は射さないけど、やっぱりGDMはいいなと、改めて思う。

GDM病のよいのは、同病者との結びつきを作りやすく、月例会を始め、自主的に行う研究会などで、互いを励ましあえる点だ。みな似たような症状を経ているので、病気への対抗策を、力をあわせて考えられる。

第二期から湧き出てきている疑問に、仲間と共に知恵を出しあうが、最終的には自分が一つ一つ解いていくしかない、あたりまえのことに気づいて、病で固くなった体も、ムダな力みがとれて、リラックスしてくる。

これでGDM病は完治したのだろうか。そうは問屋がおろさない。GDM是不治の病、GDM菌は、あばれまわるのを止めただけで確実に宿主に居すわり続けるのであります。

GDMで本格的に教え始めて半年が過ぎ、今、わたしは第三期に入ったところかなあ、という話を、月例会のあとの席で、でっちあげていたら、書くはめになった次第です。そこにいらしたスタッフの方々、どうも第一期症状の重かった方々ばかりのようです。GDMを日本中に広めようと、熱い思いで初期のセミナーに臨んだ方。ことばに関する自主的勉強会で、原書にとりくんで来た方々。

GDMは、教える者にも、学ぶ楽しさを吹き込んでくれる。今、意味論が面白くなり始め、BASIC English、私にとって理想の教育とは何かなど、自分の視野を拡げていくごとに希望をもっている。学生時代なんかより、よほど向学心に燃えている。

だから、スタッフの方々のお話をきいてみると、その変わらぬ勉強熱心さ・その楽徒（学徒）ぶりが、快よく伝ってきて、わたしにも、ただ熱意に燃えているのではなく、実際の行動へと進ませる力を分けてもらえる。持つべきものは先達・仲間ですね。

最近、教えていて気づいたことの一つ。

できない生徒がいる。本人も気にし、教師もどうしたものかと頭を悩ます。共に、悩みの領域、マイナスの領域にいるわけで、こういう心の状態での解決は、日本的忍耐と克己の歯を食いしばるやり方で、アカンと思うようになった。教師は解決策を真剣に考えはしても、深刻にマユをひそめてはイカン。あくまで、喜びの領域・プラスの領域から解決に迫っていきたい。～ すべきから ～ したいにしていきたい。まず授業を楽しくしたい。それにGDMの授業は、解放感をもたらすものだったではないか。教師がそうでない場所に閉じ籠ってでは始まらないではないか。

slow learner に、教師がしんきくさい顔で、あれこれアドバイスしたりするよりも、教師の態度から、楽しい雰囲気伝わる方が

その子のいじけがちの心を解放するのに、ずっと力になると思う。

実際には、第二期症状に逆もどりのくり返しで、悩んでしまう場合が多いのだけど、でも、そういう時は、必ず頭も体もこわばってマユをひそめているなど自覚できるようになった。そして、今書いてきたことを思い出す

小学校4年生からGDMを採用して

小川 恵子

私の教えている小学校では、1年から3年までを単語、詩、歌、簡単な自己紹介、アルファベット、数などを中心に組んだカリキュラムで、4年から6年までをGDMを採り入れたカリキュラムで英語教育を行なっている。授業時間数は1年が20分を週3回、2年が30分を週3回、3,4年が40分を週2回、5,6年が50分を週2回で、生徒数は1学級38名前後である。4年からGDMを採り入れている理由は、3年までの反復練習により培われた音声面の基礎力を活かしながら、Gradingのある教材をDirectに与えることで、4年以上の発達段階に応じていくことができると考えるからである。それではこれから実際に指導する上で留意している点をあげてみる。

- ① 導入する新出事項は1時限に2つまでに抑える。
- ② 口頭練習は十分に行なう。
- ③ Reading, writing はていねいに指導する。

最後の項目について、少しくわしくのべてみる。

「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を偏ることなく同時に伸ばしていける点は、GDMの非常に優れた点である。しかし小学生の場合、聞き話すことは比較的楽にできるのに対して、読み書くことは意外に時間がかかる。その理由は、この時期の子供の特徴として音声は聴覚が敏感で鋭くキャッチできるのに対して、文字は抽象度が高く音声と結び付きにくい面があるからである。だから頭の中で消化していくにはかなりの時間を要する。特に私の教えている学校では、音声面の力は3年

ので、これだけでも、マイナスの領域から抜け出る助けになる。ずいぶんエネルギーを無駄にしちゃったな、とほっとできるわけです。

心の状態がプラスのリラックスした領域に戻る上で、もう一つ、先程書いたように、GDMを通して、楽徒になれつつあるのも、大きな力となり、うれしいことです。

までに身につけてきているが、読み書くことは全く初めての経験なので、その現われは顕著である。しかし読み書くことに時間がかかり、それが表面的には非能率的に見えても、子供の頭の中では音声と文字を結び付ける知的活動が行なわれており、これによって聞き話すことも同時に深まっているのである。長年英語に接してきた私達にはこうした子供の内面の活動が捉えにくく、簡単に済ませようとしがちである。だがここで時間を与え、しっかり考えながら読んだり書いたりさせることは、聞き話すことの定着につながることを念頭に置き、子供の発音やあるいは書いたものを1つ1つチェックする余裕を持ちたい。また読み書くことは、聞き話すことに比べ能力差の現われが著しいから、1人1人の能力に応じたきめ細かい指導が必要になってくる。40名の中にはフラッシュカードのスベリングを1回見ただけで覚えられる子供もいれば、10回、20回見ながら書いても覚えられない子供もいる。そういう子供にとって、1つの単語を読んで書けるようにすることは大変な努力を要することで、覚えようとする気構えから指導していかねばならない。

以上、私が普段の指導で気を付けている点を述べた。40名の生徒を限られた時間と場所の中で、一斉指導によって引っ張っていくことは様々な困難が伴い、机上のプラン通り進められるとは限らない。しかしそういった困難を踏まえ、1人1人の子供がどのようにしてsituationから言葉を学び取っていくか深く観察し、より解り易く教える努力を続けていきたいと考えている。 玉川学園小学部教諭

一枚の絵から

近藤 妙子

私達の小中学生科では、講師の研究会の一環として、公開授業研究会を持つことになり、昨年の9月に第一回を試みた。対象クラスは小6・中1合併クラスで11名。進度はp. 40あたり。この研究会はさておき、今年に入ってこのクラスの担任が産休に入ったため、2ヶ月半のサンキュー先生を勧めることになった。

クラスの雰囲気は大体、研究会で知っていたが、継続の生徒の場合、一年毎に担任が変わるのでいろいろと驚かされることがある。概してまとめにくさの様な感じを抱くことが多い。まして2ヶ月半となると、生徒に慣れるのがやっとではないかという懸念もあった。

ところが実際クラスをしてみると、公の場と自分達のいつものterritoryでは、生徒の勢いも違い、発言もおもしろさが加って、なかなかいいというのが第一日目の感想だった。

前任者の方針で授業中に日本語を言うと、“5yen”を難民救済募金箱に入れねばならないので、生徒達は極力英語を使う。ページ数を意識させず定着を計るため、生徒は殆んどテキストを開かない。Tapeのhearingも純粹にhearingである。何ページまで進んだかと聞いても生徒はテキストはやってないと言う。やっている内容はETPだし、ETPに沿ったworksheetで毎回writingの練習をしている。

新学期まで2ヶ月半なので、生徒のベースを乱さないよう、前任者の方針に従うことにした。まず、Tapeによるhearing reviewを兼ねた一枚の絵による自由発言、新しい導入or practice、そしてwritingというpatternで毎回行った。この中で、生徒達の中にこれまで養われてきたものが発揮されるのが、一枚の絵によるspeakingである。これまでのitemの定着や、生徒の理解の様子がよくわかる。それに加えて、このクラスの場合、ちょっとした楽しさがある。というのは、僅かながら、一枚の絵による練習を通して生徒と英

語で会話のやり取りができるからである。

例えば、絵の中に自分達が英語で言えないものがあると、必ずWhat is this?と聞いてくるが、ある日のこと、a womanをして、

What is her name?と聞いてきた。このquestionも生徒のsentenceのひとつに加えて（*生徒から出てきた文の数を毎回、“正”の字を使って黒板に記している。）What is her name?と聞き返してやると、Her name is Charly.（ある男子生徒のニックネーム）とCharlyの悪友が答える。Is Charly a woman's name?と聞いてみると、No.

Her name is Fred.（悪友のニックネーム）とCharly。で結局、Her name is Busu.となった。Busuとは可哀想だが、みんなでつけた名前だから、Very good!である。

又、文が出つくしてくる頃、まだ言えるのにと思う時、What is in her pocket?と聞くと、私の陰で絵が見えない生徒が、I do not see the picture.と訴える。You will see it.と見せると、Now, I see the picture.と報告が返ってくる。それも数のうちにしっかりと入れておく。絵のことについてだけでなく、この様に絵の周辺に出てくるsentenceも数のうちに入れるので、一枚の絵について発言する数は毎回、50を下らない。

（もちろん、同じ文は除外）

ただ聞いていると、何でもないことに思えるが、小6や中1の子供達が単に言えるというだけでなく、徐々に意志疎通にも使い始めるまでになっている驚き。“やっていれば、そのうち……”の当然の結果ではない。GDMによるクラスでは、この様な成功例は少なくないのだろうが、現在の中高校生の英語教育を考えると、本来あるべき語学教育の成果が、驚くほどのことなのだ。

50分ずつ週2回の授業でクラスをよい形に導くには、教師の細かい配慮と準備が必要である。指導法を前任者に尋ねてみると、GD

Mの基本姿勢として、“教師が先取りをしないこと”つまり、必ず生徒を信頼して待ってやる。生徒がよくできた時は“ほめてやること”それによって、生徒は自分がどう対応したらよいかを発見し、満たされる。これを必ず守り、生徒の目を持てる教師でありたいとのことだった。一枚の絵で、多面的に発言する姿勢を植えつけることについては、一枚のネームカードを手にして言えることから始めたとのこと。前任者が初めて担当した時も、既に1年近くGDMの経験があったので、reviewも兼ねて、うろ覚えのitemも引き出

す目的で練習する。一枚のname cardの練習を毎行ない、少しずつ、giveしたり、机に置いたりという動作を加え、生徒の発言の域を広げていく。そのうち、一枚の絵を使って、さらに生徒の発言を広げていくことができたということである。

時間内にその日のitemを理解させるというのではなく、先へつなげていく経過のひとつであることを常に姿勢として持っていることが肝腎である。とにかく、言えるというか、話せる楽しさを教えてもらった有難い、サンキュー先生期間であった。(呉Y M C A)

「オソロシクモ また タノシイ…」

GDMに出会って元気が出て来た。自分がこんな風だったらなあと、きわめて漠然と抱いていた理想を、私のまわりに実現していく具体的なかたちを与えられたからだ。だがそれは、かたちとはいえ、輪郭だけで、あるいは骨組みだけで、実用品にするための肉付けは私がせねばならぬという、オソロシクモ、タノシイ姿でたち現われたのだ。そして今は、十分条件ではないが、GDMの骨組みを借りて、私が英語の授業がうまくなっていくことは、私が生きることがうまくなっていくことでもありとさえ思えてきた。とはいえ、私はまだGDM3年生で、昨年一年間の休学を経て、新学期を迎えているといったところ。ふつうの意味でも、何事かを始めて飽きるには、まだ早すぎるし、汲みとらねばならない水もまだどっさりとする。

GDMで教えるはじめてみると、ますます、生活の道具として使ったことのない者が、英語を教えるのは罪悪だという思いが強くなってしまった。幸運にも恵まれたが、母子家庭のこととてたくわえもなく、友人に借金をしまくって、帰ってきたときのことはまたその時考えるということにして、渡英へとこぎつけた。ありがたくも、「アンタ、借金できるのも器量のうちよ!」と言ってくれる友人もいたりして、この際、うしろめたさはかなぐり捨てた。

佐藤 由美子

行くことには決めたものの、依然として不安は消えなかった。3才になったばかりの息子を連れ、生まれて初めての海外渡行である。自分にまともな英語がしゃべれるのかどうかさえわかっていなかった。なにしろ、出国の瞬間からその先に一体何が待ちうけるのか、つまり、どういう場面に出くわし、どういうことを英語で表現しなければならなくなるのか、その時の私にはカイモク見当がつかなかったのだから。私の動揺しだいでは3才のころの安定を大いにおびやかすことになりかねなかった。言語体験は心理的体験であるから・・・私は日本語がまともになりつつあった息子のために、せめて、読んでやる日本語の絵本をどっさり荷作りし、二人でしっかり日本語を話しつづけることに決めて出発した。

渡英の目的は、英語を話す社会の直接体験ということだった。GDMのDの生活的実践である。

direct method というまず、日本語を介さず、学習すべき外国語だけで教える方法と考えられており、それはそれで正しいのだけれど、私はものにはもっと奥があると思う。

人間の抽象活動の産物である各言語、たとえば、英語や日本語と抽象された実世界との関係は、英語←〔実世界〕→日本語 なのだから、〔実世界〕→英語→日本語という過程を踏んではどこかに狂いが生ずるのはあたり

まえのことだ。ましてや日本語と英語のことばへの抽象のしかたは、その生活のしかたを反映してかなりちがうのだから、ある英語の単語におきかえるべき日本語の単語が辞書にのっているとおりかという保障はない。ここはやはり少々不自由でも、ことばのない未開人になったつもりで、いちからやり直した方が安全というものだろう。自分のまわりにあるまだことばに抽象される前の現象世界と直接つきあって、それをたとえば、これ、あれそれ（ここ、あそこ、そこ）ではなく、This, That (here, there) に分け直す体験的学習が必要になってくる。私は本当の direct 性はここにあってきた。

これを私のイギリス行きにあてはめれば、つまり、私の英語は文法的、訳読的学校英語教育の産物であり、いうなれば一般意味論という「地図の地図」にしかすぎない。質的にはどうということになるかといえば、大まかで不正確、それにたよってはいは、いつ地図にはのっていない穴に落ちるかも知れない不安がつきまとっていた。とにかく現地にて実地踏査をやらなければならなかった。data の波にザンブリとつかって、溺れながらも、お粗末な文法力と BASIC English 程度の語いにしがみついて、なんとかがえんばってみようという覚悟を決めた。

イギリスの英語学校で出会った初心者も教える英国人教師の中に、direct method が teacher's orientated だとわかっていないひとがいて私は啞然とした。「従来の英語教授

法(主に文法的・訳読的方法をさしている)と比較しながら direct method の長所と短所をのべよ」という作文に、私は「direct method は実は teacher's orientated であるから、教師を選べない生徒がたまたま出会った教師によって左右される確率が高く、教師が悪くても生徒が自分で予習復習をしてなんとかカバーできる従来の方法にくらべ、授業における教師の責任ははるかに大きい。」と書いたのだが、そのコメントにはこうあった。「direct method は生徒の自発的活動を促すことにそのねらいがあるのですから、teacher's orientated であるというあなたの意見には反対です。」

自発性、自主性・・・使われすぎてなお魅力的なことばである。私自身、自発的にどんな何かをやって生きて行きたいと思っているし、わが息子に対しても自主的にあれかしと願ってはいる。教室で、生徒たちが自発的に活動してくれたら、そんな素晴らしいことはない。だが教師や親として、その自発性や自主性を保障する、あるいは促すためにはおそろいほどの力がある。この力は強制力(force)ではなく別の力(power)のことだ。そのひとの必要に応じて、介入ではない援助を送ってやる力。その人が今どんな状態にあるか鋭く感じとれる力。価値観ぬきで、ひとりひとりの違いをそこにあるものとしてそっくり受け入れる力。あるいはその人の立場に立ってものをみてみようとする力。教室では教師の中のこれらの力が相互に関係しあい、

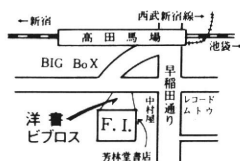
English

Through Pictures

- ◆ GDM 研究会刊行の
教材と Workbooks
教師用書・論文など
取揃えてあります。

ビブロス 通販部

〒160 新宿区高田馬場 F I ビル 4 F
株式会社 スクールブックサービス
振替 東京 4-80908 TEL (200) 4531



支えあって、生徒の活動を力づけていく。GDMのGは前述の力の協力が生み出すものだと思う。This is your book. ができてもYour book is in your bag. へ到達するまでに自分の目の前にいる生徒に必要なステップはいくつありうるかというのは、その授業の「今、ここで」をしっかり分かち合って、通じ合って生きようとする教師の意志と力によって決まってくる。graded というのはもちろん、すでにhand bookにかかれたitemを順番に教えればいいということでは決していないのだ。

「おそろしいほどの力」などということ、そんなことはとても無理といわれる方も多いにちがいない。だが私は、これらの力の基礎にあるのは感じる力であり、これは訓練次第で大きく変わりうると、私自身のいくつかの経験(活元運動や、一般意味論セミナーなど)から実感している。緊張することと、ゆるむことが上手にいききできる自分を育てられれば、アンテナの感度も良くなり、今まで自分にはできないと思っていたことが、ずい分できるようになる。その変化は何によって起るのかといえば、それまでは鈍感で限られていた外界のdataの数が、敏感になった分だけ増えて、dataの総数がかかわることによって私の頭の中で抽出される行動への判断というものも変わってくるということであるらしい。ということになれば、私にはまだまだ引き出されるべき潜在力がひそんでいるのだということになり、生きることも楽しくなってくる。

さて、私の実地踏査の成果は何なのだろう。「イギリス」というときに、一年前にはなか

った思いうかべるべきひとつひとつが、今、私の中にあるということ。それは、漠然としたのっぺらぼうのイギリスではなく、私の住んだケンブリッジの家並みと、刻々と変る雲の色、つきあった人々ひとりひとりの表情、声、ことば・・・そういうひとつ、ひとつである。こういう原体験が、私の中に何をかもし出そうとしているのか、正直なところ、今はわからない。ひとつ結論めいたことを言えば、英語を母国語として話す人々の中で、ことばの占める重要性は、私たちよりもずっと大きいらしいということ。とくに教育を受けた人たちは、私たちよりもはるかにモーレツな勢いで話す。ことばを上手に表わすことは、彼らの社会では大変な価値であるらしい。そういう人たちと話していて、私は自分が日本語を話すのがあまり得意でなかったことに気がついた。そして、それは、まだ考えたこともないものごとが自分のまわりにたくさんあったということであるらしい。ことばにならないものはこの世にはないと決めてかかるほどことば偏重にはなりたくないが、ことばをもっと大切に、上手につかう、いわば抽象力の訓練をもう少ししなければと思いはじめている。

以前にはなかったawarenessが、これからの私のGDMをどう変えていくのだろう。ともあれ、そもそもGDMが私をここまで押してきてくれた。そのGDMがこれから私に何を迫ってくるのか、再び、なんとオソロシク、また楽しいお話のはじまりである。

News

★広島・呉グループの近況

○杉田 (旧姓松井) 恵子さん 昨年8月に女児出産。

○山本 (旧姓関広) せつ子さん 昨年12月に結婚。横浜へ移る。

○迫田久美子さん 今年1月男児出産。たくましき2児の母となる。

○早川正子さん 新潟の長岡へ移る。

★東日本支部の近況

○金沢延美さん 昨年12月に結婚。

「口の重さ」に悩む

金 沢 延 美

「生徒さんたちの口が重いんですね。」

「そうですね、まだまだですねえ。」

これが東京文化センターのGDMクラスのパートナー、島谷先生との最近の電話連絡の際のあいさつがわりになってきている。生徒の口の重さ……これが、今まで経験してきたどのGDMのクラスにも共通する私の最大の悩みの種なのである。スタート当初、生徒の口から気軽に飛び出たセンテンスの数々が、EPIの後半に近づくにつれ次第々々に影をひそめてくるようになる。しかも、生徒の口からやっとこさっとこしぼり出されてくる感じなのである。当然、リーディングのリズムもなくなってくる。言葉が生命を失なって、生徒たちから離れていく感じである。私の教え方の未熟さから生徒たちが消化不良を起こしてしまうのだろうか？ 手を変え品を変えこの四年余、今や出るのは嘆息ばかりなり、まったくお手上げ状態である。話を聞いてみて、生徒たちが家で復習にかけける時間が驚ろくほどに少ないことがわかった。まったく何もせずという生徒が一番多い。毎日必らずテープを聞き自分自身も声を出してEPを読むといった練習は全くといってよいほど行なわれていない。これではせっかくのlive-situationを使っの授業効果が最大限に生かされないし、生徒たちのものになりきれないのではないだろうか？ しかし生徒にとっても、ただ単にテープを聞き、声を出して読むだけで、果たしてそれは自分のものになるのだろうか？ 感情移入しながら読むことによってこそ、私たちはその文章に生命を吹き込み、それを自分自身に吸収し身につけることができるはずである。

読む文章に生命を与えることを教えて下さったのは、大学時代の恩師、教育学部生必修のVoice and Articulationのクラスのイェール教授である。教師にはGeneral English (標準英語)、教室の隅々まで届く声、声の調子のコントロール等が要求される。教師の卵たちは週三回、四ヵ月、教授のもとで発音、発声の一般理論をたたき込まれ、広範囲にわたる実地の特訓を受けるのである。初日、私たちは一枚の紙を渡され、一人一人それを読まされた。

「君はプロの教師をめざしているのかね？ 日本人の君が日本人に英語を教える時、君自身の発音が少し位悪くても許されるのだろうか？」

この日、授業のあとこう呼びとめられ、おそまつなリーディングのおかげで(?) 私は週1回30分ずつの発音個人レッスンを受ける幸運に恵まれたのである。

教科書はG. Fairbanks 著のVoice and Articulation Drillbook である。この本には英語の一つ一つの母音と子音について各1ページ半ずつのドリルがのっている。

例えばvowel /i/ の場合、まず、bid-bead, dip-deep, pill-peal といった minimal pairs が12ほどあり、次に/i/ のくる位置によって分散された、each, eagle, east (initial), be, flee, he (final), feet, green, please (medial) といった単語が並ぶ。そしていよいよ最後が文章である。

I feel the need of deep sleep.

The eastern team was completely defeated. といった/i/ の音が散りばめられたセンテンスが10題である。さて、レッスン

風景であるが、教授は何の説明もして下さらない。私が単語を読むたびに教授の「もう一度」「もう一度」がくり返される。演劇学部長である教授の耳は、あいまいな音を決して聞き落とすことがない。あまりの「もう一度」の連続に「テープにふき込んでいただけないでしょうか?」と教授に懇願した。

「君のpleaseと、僕のpleaseと、まったく同じ読み方だろうか? …please, please, please, please …。」 pleaseと、教授の声は、やけっぱちになり、哀願になり、絶叫になり、冗談めかした口調になり、甘い声になり……。単語が生きている! 卒業するまでの二年半、教授が読んで下さったのはこのplease だけである。

「君に今、何が見えますか?」

初めて文章練習に入った時の教授の言葉である。

I feel the need of deep sleep.

I feel the need of deep sleep.

私には答えられなかった。何度も何度も声を出して練習してきたはずなのに、何も見えてはいなかったのである。

「頭をカラッポにして一つのセンテンスを声を出して読みなさい。30回、40回、50回……、きっと何かが見えてくる。」

教授の言葉は正しかった。1回、2回、3回、……40回、50回……、少しずつストレス、ポーズの位置、イントネーション、スピード、声の大きさ等を変えながら読んでいくと、不思議に自分の気持ちがスッと入っていかれる時が出てくるのだった。その時々によって私は、心穏やかに死を迎え入れようとしている老婆になり、期末テストを終えたばかりの大学生になり……。文字が消えて、センテンスが見えてきたのである。一つの何気ないセンテンスの限りない広がり……。読みこまなければ、自分が入っていかなければ、読む文章は決して私のものにならないのだった。

イエール教授との個人レッスンの体験から、感情移入しながら声を出して教科書を読むことがいかに大切であるかを生徒の一人一人に理解させたい。これが、「口の重さ」という問題解決への糸口につながるのではないだろうか、と考えるのである。

東京文化センター講師

★3月27日～3月30日の3泊4日、GDM春のセミナーが六甲YMCA研修センターにて行なわれました。itemを1人が3回も積極的にトライした受講生もありました。

★8月19日～29日(日曜を除く10日間)朝日カルチャーセンターで、午後1時～3時 Teacher's Trainingを行ないます。

(講師は吉沢、東山、山田)

★GDMクラスを開いているところ。

○朝日カルチャーセンター成人クラス(吉沢、升川、東山、小川、弘田、唐木田)

○横浜アカデミー成人クラス(安西、佐藤)

○千葉YMCA小学部

○東京YWCA駿河台センター 中学1年生(大塚、服部)

○東京文化センター(島谷、金沢)

○京都YMCA小学部

○奈良YMCA小学部

○名古屋YMCA小学部

○広島YMCA小学部

○呉YMCA小学部

★新刊 吉沢美穂著「教科書を使いこなす工夫」大修館書店 ￥1200

Summer Seminar, 1981 のお知らせ

入門期の英語教授法

入門期の英語指導に有効な技術 — situation を活用して、先生はあまりしゃべらず、生徒の発表力をそだてることを中心にすえながら、四技能を平均してのばし、同時に教師も高度の thinking in English の習慣を身につける技術 — Graded Direct Method の正しい方法を研究してみませんか。

各方面から注目されている当研究会のサマー・セミナーを涼しい富士山麓の御殿場で開きます。GDMの方法で実際に英語を習っている子供たちの実験クラスを見学したり、実習しながら、討論の積み上げによって理論をふかめ、わたしたち自身もいっしょに育っていこうと計画しています。

とき： 1981 年 8 月 7 日 (金) ~ 11 日 (火) 4 泊 5 日

ところ：日本 Y M C A 同盟東山荘 静岡県御殿場市東山 TEL 0550 (3) 1133

講師： 東山 永 (朝日カルチャーセンター 講師) 松野 和彦 (東京大学助教授・発音クリニック)
片桐ヨウコ (京都 Y M C A 講師) 小川 和子 (朝日カルチャーセンター)
小高 一夫 (松蔭女子大教授) 弘田 令子 (朝日カルチャーセンター講師)
箕田 兵衛 (東京都港区立赤坂中教諭) 山田 初裕 (東京都立向島商業高校教諭)
夔川 嘉孝 (NHK 学園高校教諭) 吉沢 美穂 (国際基督教大講師・GDM 研究会代表)
中郷 安浩 (大阪市立大助教授・発音クリニック)

内容： (a) Theory (d) Discussion
(b) Class Observation (e) 発音 Clinic
(c) Training (f) Recreation

※ Class Observation では GDM で授業している小学生のクラスを実際に見学します。

受講資格：英語教師または英語を教えることに興味があり、このセミナーに全期間参加できる人

定員： 一般セミナー……この方法について初めて学ぶ人 (60名)

定員 中級セミナー……GDM セミナーの経験がある人 (30名)

上級セミナー……この方法による授業経験が豊富で、より深い研究を希望する人 (20名)

受講料： 申込金 3000 円 受講費 20,000 円

宿泊料： 28,000 円 (4 泊 5 日 食事つき)

教材： English Through Pictures, Book 1
Teachers' Handbook for English Through Pictures

申込先： 〒 543 大阪市天王寺区南河堀町 9-53

大阪南 Y M C A GDM セミナー係 Tel 06-779-8361 内線 49 番

しめきり： 7 月 20 日 ただし、定員に達しだいしめきります。

編集後記：今回は、「現場から」という特集を組んでみました。一条校の先生がたが夢中になって GDM ととり組んでいる姿が目につかびます。中学校は 1 週 3 時間、内容のある授業を目ざしてがんばっていきましょう。(小川和子・安西聖雄・みか川嘉孝)